

ピリピ書3章1-11節 「喜びを守る」

1A 肉の誇りの拒否 1-6

1B 肉体だけの割礼 1-3

2B 肉の誇りの嘲り 4-6

2A キリストとのつながり 7-11

1B 塵あくたである自分 7-8

2B キリストの中にある者 9-11

本文

ピリピ人への手紙3章を開いてください。早速、3章1節を読みたいと思います。

1A 肉の誇りの拒否 1-6

1B 肉体だけの割礼 1-3

1 最後に、私の兄弟たち。主にあって喜びなさい。前と同じことを書きますが、これは、私には煩わしいことではなく、あなたがたの安全のためにもなることです。

パウロは「最後に」と言っていますが、これは「残りのことですが」と言っているのと同じです。彼が、自分がローマで投獄されていてそれでピリピの人々ががっかりしないように、今、主にあって喜んでいるのですから、いっしょに喜んでください。そして、テモテも、またあなたがたの同労者エペフロデトも、送りますから、と話していました。このように手紙で書いて、息をつくことができたので、その他、まだ話していない話題を取り上げています。けれども、これがまた「主にあって喜びなさい。」であります。他の残りのことを話すのですが、これから彼は、偽りの教えを取り扱います。実際に、ピリピにある教会に入ってきている偽教師たちのことを書きますが、その者たちに取り組む時も、やはり「主にあって喜びなさい」という勧めが、役に立つのです。パウロは、「あなたがたの安全のためにもなる」と言っています。

私たちはこの手紙の中で、主にあって喜ぶことについて学んでいます。パウロが、ローマの牢の中に入れられているのに、それでも喜んでいられるというのはどういうことでしょうか？それは、「主にあって」喜んでいることです。環境や周囲で起こっていることを見るならば、私は、失望し、落胆します。怒りも出てくるし、苦々しくなりもします。あるいは、良い環境や状況が与えられると、その反対に有頂天にもなります。しかし、私たちの喜びは、深く、主イエス・キリストとの個人的、人格的關係の中に根ざしていなければいけない、ということです。それが、「主にあって喜ぶ」ということです。

パウロは、それぞれの章で主にあって喜ぶことについて語っています。1章において、彼は、「生

きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と言いました。自分の思いがキリストだけに一点集中になっている時に、自分の周りの状況を正しく、神の見ておられるように見ることができます。パウロは、牢獄に入れられていたけれども、その親衛隊に福音を伝えることができ、そして福音が拡がっていきました。またパウロのことを妬んで、それで彼を引き落としながら福音を伝えている者たちがいるけれども、キリストが宣べ伝えられているのだから、私は喜ぶます、と彼は告白しています。自分に物理的制限がかけられると、がっかりしてしまいますが、キリストを第一にしている時にそれが神によるまたとない機会となっていることに気づきます。そして、自分と考えの違う人、また自分のしていることに反対さえしている人が、けれども福音を伝えています。それでも、キリストの御名が高められているのですから、喜びます。生きることはキリスト、なのです。

そして2章では、「主にあって喜ぶ」ことについて、「へりくだり」を見ました。「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。(2:4)」とありました。キリストの内にある者は、まずキリストの名が高められることを喜んでいきます。そして、人々の間でキリストの名が広められることを喜んでいきます。またキリストの名によって何かを行なうことを喜んでいきます。自分のことを第一に求めないのです。キリストが第一で、自分はその次です。そして、自分の前に他者が来るのです。この中で真の喜びが培われます。

そして3章です。主にあって喜ぶことが、自分にとって安全だということです。偽りの教えから守られ、安全だということです。こうした偽りの教えは、私たちの心にある喜びを奪い取ります。言い方を変えると、主にあって喜ぶ、その主との豊かな関係が薄れてくる時に、私たちに待っているのは偽りの教えだということです。それは、「イエス・キリストを一番にしないところの、他の部分で満ちしを求めようとする。」ということです。それは、主が私たちのために行ってくださいましたことから心が離れていっていると、二つのことを始めます。一つは、主の恵みではない、自分が何かできるのではないか？という、行ないに基づいた義を求めていこうとすることです。その行ないによる義について、3章では1節から11節で取り扱われています。そして、もう一つは、「他の自分の肉の欲を喜ばせることができるものがほしい。」という誘惑です。そこで17節以降にある、自分の腹、欲望を神とする偽りの教えが書かれています。私たちは、この自分の肉によって義を求めようとする、その動きについて注意しなさい、ということをお話しています。主にある喜びには、こうした肉の働きへの注意が含まれるのだということです。

私たちの周りには、実にそのようなものが多いです。もちろん、世の楽しみであれば、それは明白です。肉の行ないとして、不品行や中傷、また酪酊など、世は当たり前のように行なっていることに、自分もはまり込んでしまいます。けれども、何か良いことをしていれば、それがキリスト者の働きであると思えば、それが最も巧妙であります。良いことが必ずしも、主の前に正しいのではありません。むしろ、その良いと思われることをで自分の充足を求め、また評価を求めていくことがあります。あるいは、世間から無視されたくない、悪く思われたくないと思うので、何かを行っていくことがあります。これらのことを「肉を誇る」とパウロは言います。つまり、私たちが生まれた時から持

っている性質です。それら自体は悪いものではないのです。しかし、キリストにある新しい自分にあって生きようとする時に、それらのことがキリスト以上に大事なもの、キリスト以上に愛しているものとなっています。それが肉の誇りであり、自分の生きていることについての高ぶりでもあります。

2 どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。

ものすごい激しい言葉を、パウロは偽教師たちに対して使っています。「犬」であります。私たちの考えるような愛玩動物としての犬を考へてはいけません。獐猛な野良犬のことを指しています。当時、ユダヤ人が異邦人について使っていた言葉を、パウロはそのまま、これらユダヤ主義者に対して使っています。そして、「悪い働き人」と呼んでいます。彼らは、宗教的なことを強調していました。どんなに道徳的で、宗教的に見えようとも、キリストにある神の恵みにおいて、いかなる人の働きもそれに貢献できないのです。ガラテヤ書によれば、「もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。(2:21)」とあります。それで「悪い働き人」としたのです。それから、彼らを「肉体だけの割礼の者」と呼んでいます。彼らは割礼を受けることによって、それでアブラハムの契約の中に入ることができ、異邦人はこの割礼を受けて初めてイスラエル民族に与えられた救いを得ることができるのだ、としました。そこで、男性の性器の包皮を切る儀式である割礼であります。それを「ただ肉体の一部をちぎり取っている者ども」という感じで、ここで話しているのです。

私たちに、なぜパウロがここまで激しく、妥協なしに、深刻にこれらの教えを警戒しているのか、その背景をお話します。初代教会は、エルサレムで祈っていた弟子たちに聖霊が下ることによって始まりました。そこに集まっていたのは、世界中からのユダヤ人たちです。彼らが悔い改め、主イエスを信じて、そして水のバプテスマを受けました。すべてユダヤ人であり、そして彼らは祈るために神殿に上がっていき、ユダヤ教徒としてその一派として動いていました。ところが、エルサレムの教会に迫害が起こりました。そこで彼らは外に出て逃げる人々もいました。その中で、ピリポがサマリヤで伝道して、サマリヤ人が信じて救われていきました。エルサレムの教会は、そこで主の御霊の働きに驚き、ペテロとヨハネを遣わしています。

しかし、サマリヤ人はユダヤ人と異邦人の混血の民であり、その宗教もユダヤ教の影響があります。ところが、ある時にペテロに神の幻が与えられます。それが、レビ記の食物規定で禁じられた動物がある風呂敷でした。屠って食べなさいと言われるのですが、ペテロはそれを拒みました。しかし、その夢の意味を考えると、コルネリオという異邦人でローマの百人隊長のところに行きなさいと命じられるのです。そこでそこに行き、福音を伝え、それでその一家が信じて、聖霊のバプテスマを受けたのです。しかし、そのことにはエルサレムの教会は反対でした。どうして、異邦人と食事などするのか、と責めたのです。しかし、ペテロは事の次第を順番に説明して、彼らがそのまま、つまり割礼を受けずに異邦人のままで、主イエスの福音の言葉を聞き、それで聖霊のバ

プテスマまで受けたのだ、と説明したのです。それでエルサレムでは、「それでは、主は、異邦人をもご自分の救いに入れておられるのだ。」と言って神をほめたたえました。

そして、キリスト者を激しく迫害している、律法に熱心なサウロ、後にパウロという名になるユダヤ教徒がイエスご自身に捕えられて、異邦人の使徒となります。ところが、エルサレムにいる、律法に熱心な信者の一部がやって来て、アンティオケにいる異邦人信者に対して、「あなたがたも割礼を受けなければ、救われぬ。」と教えたのです。イエスを信じるだけでなく、割礼も受けて初めて神の国の中に入れるのだと教えたのです。それで、パウロとバルナバと彼らが激しい対立が起きました。それをエルサレムにおいて話し合うことになりました。そこで、ユダヤ人に福音を伝えるペテロも、そしてヤコブも、パウロの宣べ伝える恵みの福音こそが真正であるという決着を聖霊によって付けました。

しかし、エルサレムにある教会では、こうした決議に不満を持っている輩がおり、パウロが宣教に行くところに、どこにでもその後に行き、そしてパウロは真正な使徒ではない、私たちはエルサレムから来たものであり、正確にイスラエルに与えられた福音について語るができる、というようなことを話し、それでそこで福音を信じた者たちを自分たちのほうに引き寄せることをしたのです。

二つの種類の人々に気をつけるべきです。一つは、いつも未信者に対して福音を伝えるのではなく、既に信じている人々、既に教会に集っている人々に自分の信じていることを宣べ伝えようとする人々です。そして、もう一つは、キリストに人々を導くのではなく、自分自身に引き寄せようとする人々です。パウロは、こうしたユダヤ主義者と取り組んでいました。彼らは、「イエスを信じない」と言わないのです。いや、イエスを信じているのです。しかし、「イエスを信じていると言っても、これこれをしなければ信じたことにならない。」であるとか、「信仰」に加えて他の要素を付け加える時、それが偽りの教えとなります。パウロは、この問題をガラテヤ人への手紙で、真正面から取り組んでいます。

3 神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。

パウロは、ローマ人への手紙2章でもこのことを取り扱いましたが、男性の性器の包皮を切る割礼という儀式は、私たちの頑なな肉の心が切り取られて、御霊によって新しくされ、神の御声を聞きとることができるということを示しているものです。主はモーセを通して、イスラエルの民に「申命記 10:16 あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もうなじのこわい者であってはならない。」と言われました。体に対して行なう割礼は、飽くまでも主の命令に聞き従う心を示していて、心の包皮を切り捨てることを意味していました。

しかし、彼らはそのことに失敗して、律法を守ることができませんでした。そこで、主はエレミヤ書

で、新しい契約を与えられ、石の板にある律法ではなく、心にご自身の律法を置くと約束してくださったのです。そして預言者エゼキエルは、それが神の御霊によるのだと宣言しました。「エゼキエル 36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」そこで、ここでパウロが、「神の御霊によって礼拝をする」と言っているのです。イエス様はサマリヤの女に、「神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。(ヨハネ 4:24)」と言われましたが、御霊によって新しくされたその心で、神を礼拝するということです。

そして、「キリスト・イエスを誇り」と言っています。これは「イエス・キリストを喜んでいる」と訳してもよい言葉ですが、どんなに表面的に良く見えても、行ないによるものならばキリストではなく自分を誇りにすることになります。唯一、私たちの誇りを取り除くことができるのは、行ないではなく、信仰による原則、神の恵みの原則なのです。「ローマ 3:27 それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。」自分が行なったことではなく、自分が不敬虔でも、それでもその者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされます(4:5)。

それから、「人間的なものを頼みにしない」と言っていますが、これは直訳にすべきでしょう、「肉を頼みとしない」となっています。そしてパウロは、肉を頼みとするならば、私こそがそれができるはずだったのだ、と述べます。

2B 肉の誇りの嘲り 4-6

4 ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

ユダヤ主義者らが行っていたのは、肉に拠り頼むことでした。割礼を受けている、エルサレムから来ている、私たちはイスラエル人だ、割礼という律法は大事に守られなければいけない、など、いろいろ話します。しかし、律法主義の人々にある特徴があります。それは、「自分自身が守れていない」ということです。自分たちが主張している律法について、その特徴や性質もよく分かっていない問題があります。その二重基準があります。高い基準を設けて他の人々が守るように強いるのですが、自分自身はできていません。

しかし、パウロは、ユダヤ人であること、また自分自身が律法を厳格に守る者でした。そのことを詳しく話しています。彼らはユダヤ主義者が話すところの、もっと先を言っていた人々でした。スポーツ選手でいうならば、県大会で選出された人が威張っているところで、世界選手権またオリンピ

ックに選抜された人の話をしている、という感じです。パウロはまず、「八日目の割礼を受け」と言っています。モーセの律法に書いてあるように、アブラハムに命じられた契約の徴を八日目に受けました。割礼派と呼ばれる彼らには、ずっと後で割礼を受けた者たちもいたことでしょう。そして、「イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者」と言っています。系図としても、イスラエル十二部族からの立派な家系を持っています。ベニヤミンは、イスラエルがソロモンの死後分裂した時に、ユダ族についていった部族です。そして神殿のあるエルサレムとも境に接しています。それから、「きつすいのヘブル人」と言っています。当時は、ギリシヤの時代にギリシヤ化したユダヤ人がいました。けれども、伝統的なヘブライ文化をしっかりと守っていたユダヤ人たちもいました。パウロは、その正統的な系統にいたのです。

そしてパウロについては、律法についての義について言えばダントツでした。「律法についてはパリサイ人」と言っています。彼らこそが、当時のユダヤ人世界で、最も律法を厳格に守る宗派として認められていた人々です。その名も、「分離した人々」ということです。律法を守ることで、他の汚れたものから離れ、神だけに属しているとされていました。使徒 22 章 3 節には、パウロはガマリエルの下で律法を学んだと書かれており、ガマリエルは当時、もっとも優れた教師とみなされていました。そして、「その熱心は教会を迫害した」と言っています。ステパノへの石打ちに同意し、そしてキリスト者たちを捕縛し、また打ち叩きました。これは、知識によるものではないことをローマ 10 章でパウロは話しています。それから、「律法による義についてならば非難されるところのない者」と言っています。これは、すごい発言ですが、実際にそうでした。しかし、彼はもちろん知っています。ローマ 7 章で述懐していますが、「律法は霊的なものであることを知っています。(14 節)」なのです。パリサイ人の律法の義は、外側の行ないに集中していましたが、キリストご自身はそれを内なる態度も含む行ないであることです。つまり、人を殺していなくても、人を憎んでいたならそれで殺人の罪を犯したことになります。それで彼は、とんでもない罪人であることを悟ったのです。

2A キリストとのつながり 7-11

ここまで彼は、自分の肉で誇るべきことを語りましたが、これは決して決して、自分を誇っているのでもなく、優れているのだということでもありません。むしろ、キリストを誇るために、キリストを喜ぶために、これらのことが糞であると、ちょっと汚い言葉で申し訳ありませんが、事実、そうしたことばでぶった切っているのです。

1B 塵あくたである自分 7-8

7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。8a それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

キリストのゆえに、これらを損と思うようになっている。また、キリストを知ったそのすばらしさのゆ

えに、全てのを捨てている、と言っています。キリストと、これらの自分の行ないによる義との間には月とスッポンであったということです。とんでもない違いがあり、とてつもない大きな栄光と祝福がキリストの内にあります。そして彼は、「ちりあくた」とみなしています。この塵芥こそ、ギリシヤ語では、「汚物」という意味も含んでいる言葉なのです。

ローマ人への手紙7章では、自分の肉の力によっては、なんら善を行なうことのできないパウロの惨めな告白が書かれています。自分のしたい善が行なえず、憎んでいることを行なっている。だが、この死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか？と叫んでいます。けれども、キリスト・イエスのゆえに神に感謝していると彼は誇っているのです。なぜなら、この肉の弱さのゆえにできなくなっていることさえ、神がキリストを私たちと似せて肉体を持たせ、そしてその肉体において、律法の違反を処罰してくださったからです。そしてパウロは、御霊に導かれる者の中には、律法の要求が全うされていると言っています。そして肉について、こう言っています。「ローマ 8:7-8 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。」肉にはなんら善は残っていないのです、がらくたなのです。

しかし、だからと言って、生まれてきてから与えられた環境や能力がすべて間違っていると言うことでは全くありません。パウロは、「生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召し出してくださいました方(ガラテヤ 1:15)」と言っています。彼が、ユダヤ人として律法を学んだからこそ、神のご計画の全体を解き明かすことができました。そして、彼がギリシヤ人の町タルソで育ったからこそ、ギリシヤ語を流暢に操り、ギリシヤ文化にも精通していました。そして、彼は生まれながらローマ市民であったので、あれだけの広域の宣教を行なうことができました。これらは神にあって益となるのです。しかし、そうしたことはキリストが自分の心の王座に着かれようとする時に、何とかして着かせないとするプライド、高慢となるのです。その王座から自分が降りて、キリストに王座に着いていただくには、このはっきりとした立場、つまりキリストのすばらしさを知っていること、そしてそれと自分の業績がどうしようもないこと、この立場を取ることで。

これぞ、まさに肉の切除、御霊による割礼であります。自分の肉の誇りが切り取られます、痛いですが、でも、キリストに満たされ、喜びに満たされます。

2B キリストの中にある者 9-11

パウロが、新しい御霊による関係に入ることについて、三つのことを話しています。一つは、8 節にあった「キリストを知っている」ということです。これは、キリストについて知っているということではありません。キリストを知っている、ということです。つまり、情報として、また知識としてではなく、人格的に、個人的に知っているということです。私が、安倍首相について知っているというのと、私の妻を知っているのでは、雲泥の違いがあります。安倍首相については、日々の動向で新聞にも報道されていますし、調べようとするれば詳しく調べられるでしょう。しかし、私の妻との関係に比べた

ら全然違います。パウロは、キリストを個人的に、人格的に知っていました。その知識があまりにもすばらしいと言っていますが、どうかこのキリストとの出会いをしてください。その出会いをしている人であれば、次のある信仰によって生きることを実践することができ、自分の行ないによって生きることから避けることができます。

8b それは、私には、キリストを得、また、9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

これが、二つ目です。二つ目は、「信仰による義」です。自分を正しいとしていきっている生活から、キリストこそ、神こそが正しいとして生きていく生活であります。その前に、「キリストを得」という言葉がありますね。これは実に、信仰の立場を表しています。キリストを得るために、自分のあらゆるものを捨てていく態度です。自分の知性、自分の感情、自分の意志、すべての働くものを、キリストを得ることゆえに、今、自分の持っているものを否んでいくことです。

ここで信仰による義について、二つの立場が書いてあります。一つは、今の立場です。「キリストの中にある者と認められ」とあります。つまり、自分自身の義ではなく、キリストの内に自分がいるので、神は私の義ではなく、キリストの義をもって私を認めておられるということです。だから、大事なものは信仰であり、どんな状況でも、どんな場合でも、それでも神を信じるとする立場、その信仰を神は喜んでくださり、義とみなしてください。そして、もう一つは、将来の立場です。「信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがある」ということですが、自分の義ではなく、神から賜物として義が与えられるということです。ですから、自分を正しくしていくのではなく、神が正しいとする立場を取り続けることでもあります。そして自分に与えられる正しさについては、神が将来、授けてくださるので、それを待っているということでもあります。具体的には、キリストが天から戻って来られて、教会が引き上げられ、そして報いを与えてくださることによって実現します。

ところが、信仰による義について、それは行ないと関係がないと言ったら、全くの間違いです。神を信じる信仰には、必ず御霊が働いてくださいます。御霊に導かれる時には、必ず実を結ばせます。行ないの実を結ばせます。信じる時には、行ないが伴うのです。しかし、行ないによって義と認められるわけではありません、その行ないは肉から来るので、どんなにすばらしいように見えても、悪い実を結びます。

10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

三つ目は、「交わり」です。ここに「あずかる」という言葉が書かれていますが、これは「交わり」の

ことです。キリストとの交わりは、初めに「キリストとその復活の力を知」ることから始まります。死者の中からよみがえられた主ご自身が、私たちに会ってくださる時、その復活の力をもって会ってください。十字架の死によって、私たちの古い人は共に死にましたが、復活によって、私たちは新しい命にあずかりました。

これを知った人は、それで終わりなのではありません。キリストに結ばれた者として、私たちはこの地上にいる時に、キリストの苦しみとその死、また復活との交わりをしていく者として召されているのです。「キリストの苦しみにあずかる」と言っていますが、パウロは1章で「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。(29節)」と言いました。キリストを信じるだけでなく、その苦しみも賜物として受けているのです。信仰であれば、プレゼントとして喜ぶことができるでしょう。しかし、苦しみをプレゼントとして受け入れることは、なかなかできません。けれども、これもキリストにあずかることなのだ、として受け入れる時に、その明け渡された心はいつも喜んでいます。イエス様が、義のゆえに迫害される者は幸いであり、大いに喜びなさいと命じられました。私たちは、この地で福音を信じるということは、人気のないことです。人々から冷たい視線をもらうことです。人々と異なることをするので、孤独を味わいます。しかし、これらのこともキリストからの賜物として喜ぶのです。自分が主につながっていることの証しなのですから。

そして、「キリストの死と同じ状態になり」と言っています。そうです、これは自我とも言うてもいいかもしれません。自分に死ぬことです。神の救いのために、人々が救われるために死ぬことです。キリストが現れるために、自分が死ぬことです。これはしんどい作業です。しかし、キリストご自身にとってもしんどい作業でした。ゲッセマネの園がそれをよく表しています。しかし霊は知っています、ここにこそ神の愛があり、喜びがあり、平安があるということ。そしてパウロは、文字通りの殉教も視野に入れていることでしょう。そこから、「どうにかして、死者の中からの復活に達したい」と言っています。そうです、死を経てこそ復活の力にあやかることができます。自分ではなく、キリストなのです。これをぜひ、どんな小さな事でもいいですから経験してください。自身がつきます。そして、パウロの場合は文字通りの、体の復活も考えていたことでしょう。殉教しても、キリストの内にいるがゆえ、また復活させていただくのだと言う信仰です。